

た爲に起り、其の名夙く源平盛衰記・義經記に出で、古歌にも『汐こしと人はむべにもいひけられたる枝や根上りの松』といひ、又は『みつしほのこえてやかゝるあらかねの土もあらはに根上りの松』ともいうてゐる。前者はまた西行の詠とせられ、後者は明智光秀の吟として傳へらるゝ所であるが、その作者の何人であるかを論ずるの必要なく、單に此等の詠歌を通じて、根上りの松即ち汐こしの松なることを知り得れば足るわけである。道興が故らに『尋ね侍り』というたのは、其の位置稍本折より北で、佛原に至る順路ではないが、古來の名嶽であるから、特に杖を曳いたものなるべく、その越前のもとの加賀のものとはおのづから別物であらう。

**シホサカ** 塩坂 平家物語に木曾義仲が山門に興へた降伏に、『平氏大將軍二十萬軍士一發向北陸。越州賀州低波黒坂塩坂篠原以下城郭數々度合戦。』とある。塩坂は羽咋郡志雄越のことであらう。

**シホツ** 潮津 ↓ウシホツ 潮津。鹿島郡笠師保に屬する部落。能登名跡志に『海邊に在り。能き村也。沖に辛島というて神森あり。此島風景勝れり。』とある。

**シホツ** 鹽津 ↓ウシホツ 潮津。珠洲郡寺家の垣内で、遭崎の南方崖下に在る。又遭崎・宿崎の間の入江を鹽津湊といふ。能登名跡志に『昔は此邊の津にて、繁昌なる所なりしといへり。今は寺家村の内に成りて散村也。此村に刀根の傳兵衛として、太閤秀吉公の御朱印持傳へり。舟一艘の械役御免の御文言也。名宛は鹽津村四郎右衛門とあり。又此村の一向宗御坊に聖徳太

子の靈像あり。色々奇瑞あり。又大泊とて、此鹽津の内にて家一兩軒あり。是にも鹽津繁昌の時は、餘程家數ありし所といへり。』と記する。

**シホツエキ** 潮津驛 加賀の古驛。之保津と訓む。こは兵部省式に加賀國潮津驛馬五匹とあるもので、その潮字が潮字の譌なることは、延喜式神名帳に潮津神社あるを以て知られる。今も江沼郡に潮津があるが、ウシホツと訓んでゐる。

**シホツガタ** 潮津潟 江沼郡潮津に往時柴山潟から連續する潟があつて、それを潮津潟と言ふたが、大聖寺藩の時に埋立てたといはれる。

**シホツガハ** 塩津川 鹿島郡塩津領かな谷内より流れ出で、同領の海に入る。流程二軒餘。

**シホツザキ** 鹽津崎 ↓アヒザキ 遭崎。**シホツジンジャ** 潮津神社 江沼郡潮津に鎮座する。延喜式神名帳に江沼郡潮津神社と載せるもので、シホツと傍訓してある。式内等舊社記に、『潮津神社。式内一社。潮津村鎮座。今稱天神社。有古代之神像。或云鹽土翁之神體也。』と見え、今は鹽土翁を祭神とする。

**シホノヤマ** しほの山 古今集卷七賀歌に、『しほのやまさし出の磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く』とあつて、このしほの山は甲斐國とするのが古説であるが、能登とする説もある。契沖の古今餘材抄には、平家物語にしほの山打越えて能登の國小田中新王の塚の前に陣を取るとあるを引き、しほの山まさし出の磯共にそこであらうといひ、眞

淵の古今集打聽には、延喜式の羽咋郡之乎神社、萬葉の之乎路を引いて、右の歌は汐と意得て志保と書き、又それからさし出の磯と續けてよんだのであらう。しほはしをの誤りで、今の京となつてからかゝることは多いといふて居る。

**シホハマ** 鹽濱 江沼郡北濱に屬する部落。年不詳十二月八日附、堀五兵衛宛所、頼介(頼廉歟)の判書に、『去頃鹽濱夜討之刻、首一被討捕之通途披露候。可被拙忠節事肝要候。』とある。

**シホマイハヒ** 鹽濱祝 藩政時代に能登の鹽田地方に在つては、春土用に鹽田に砂を配置し、その稼業の準備の成つたを引配り祝といひ、初めて製鹽を出したことをシリズムといひ、十月頃製鹽の終つたことを悉皆祝といふて、孰れも使用人に酒食を興へた。悉皆祝の中、藩から借用の鹽手米を返上し得たるを皆濟祝、鹽手米返濟額以上に製産上納したるを過上祝といふた。

**シホハラ** 鹽原 能美郡輕海郷に屬する部落。

**シホバライシ** 鹽原石 能美郡原から産する石材。石英粗面岩質凝灰岩で、帯灰白色石基中に帶青色礫を混する蛙目であり、質稍硬い。

**シホブギヨウ** 鹽奉行 ↓シホ 鹽。シホヤ 塩屋 江沼郡西庄に屬する部落。その海港は塩屋浦とも堀切港ともいひ、往時は大聖寺藩唯一の港であり、三月から九月までは賣船の出入するものあつたが、今は洲をなしてゐる。

**シホヤウラ** 塩屋浦 江沼志稿に、江沼郡塩屋村領から、片野村領長者屋敷に至るまでの海濱を塩屋浦と名づけるとある。

**シホヤウラマブギヨウ** 塩屋浦間奉行 江沼郡堀切港の船舶出入を取締り、塩屋・吉崎・瀬越の三ヶ浦をも管轄するもので、その大聖寺藩の定書は、寶永二年のものを最古とする。

**シホヤケイスケ** 塩谷啓介 鳳至郡道下の人。明和四年に生まれ、少壯の時京都に上り、淺見綱齋の門人小川某に就いて漢籍を學び、刻苦勉強大に得る所あつた。後郷に歸つて子弟に教へたが、遠く羽咋郡より來り學ぶ者すらあつたといふ。弘化四年八十一歳を以て歿。

**シホヤセイゴロウ** 鹽屋清五郎 ↓イハキセイゴロウ 岩城清五郎。

**シホヤマチ** 塩屋町 金澤の町名。龜尾記に、塩屋町は今の金澤城大手前に在つたのを、寛永年間此の所に轉地したとあるから、同十三年火災の際のことであらう。町名の由來は、藩政の時塩屋屋を置かれ、能登諸浦の製塩等を賣捌かした爲とも、萬治三年以前に塩座のあつた時の名稱が残つたのであるともいふ。

**シマ** 島 能美郡白山下に屬し、東島と西島とに分かれて居た。明治十四年改めて桑島と稱することになつた。

**シマ** 島 能美郡粟津郷に屬する部落。枝村に養輪がある。

**ジマイ** 地米 加賀藩で、金澤近邊に産する米穀の意であるが、加賀三郡内のものは皆地米を以て呼ばれた。

**シマサキシユク** 島崎淑 字は元慎、號は省齋。能登の人。皆川洪園の門に遊び、能く